

令和7年度丹波歴史講座「『香良志』を読んでみよう」@氷上住民センター(2025/10/26)

松下正和(神戸大学地域連携推進本部・特命教授)

はじめに

・香良地区とのかかわり…岩瀧寺(2012年7月)、香良公民館(2013年6月)、円悟寺・岩瀧寺(2014年9月)、住吉神社(2014年11月)の調査、香良志(2022年11月)、香良村文書(神戸大学附属図書館蔵若林泰氏収集文書)(2024年11月)の香良文化祭での報告など

・『香良志』を知った経緯…2022年に足立義昭氷上郷土史研究会会長(当時)経由で香良自治会長・公民館主事より解読の依頼

→兵庫県内の図書館検索にも出てこず、県内の図書館にはない貴重なもの。

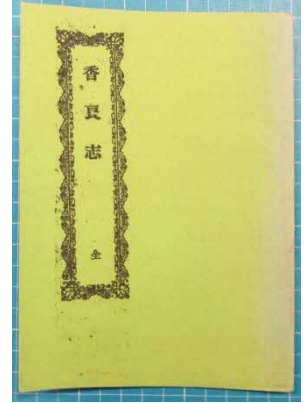
現在国立国会図書館デジタルコレクションのHPからも閲覧が可能。皆さんもアクセスしてみてください!

(<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/765690>)

→文体について…学校教育の「古典」の授業では古文や漢文で「歴史的仮名遣い」を学ぶ機会はあるものの、旧字体や正字、異体字・合字などについて学ぶ機会はなく、昔の言い回しや文字が難しく読みづらくなっています。特に、序文は漢文や漢詩が書かれ、また本文に関しては送り仮名がカタカナ混じりで書かれているため、一見すると読みにくいものとなっています(よって、書き下しや現代語訳が必要)。

(例) 異体字・合字とは、カタカナの「ト」と「キ」を合体させた「𠂔」や、「ト」と「モ」を合体させた「𠂔」、
「コ」と「ト」を合体させた「𠂔」、
「シ」と「テ」を合体させた「𠂔」などがあります。

・ただし、香良地区内のスポット紹介の内容自体は、皆さんも見聞きしているものが多く、香良の地区のことについては、ヨソモノの私よりも地区住民の皆さんのほうがよくご存じのはず。むしろ色々ご教示をいただきながら読み進めていきたいと思います。また、今回は香良に直接関係ない箇所は省略しました。



1. 『香良志 全』の書誌情報について

(1) 奥書からわかる情報

・『香良志 全』(以下、『香良志』と略)の書誌情報について

…タテ18cm×ヨコ13cmの小冊子(活版印刷)、定価5銭、著者「松樾(しょうえつ)居士」、明治26年11月8日出版、明治26年11月16日発行、発行者兼印刷者は「丹波国氷上郡柏原町ノ内本町壱番地 岡林一三郎」、印刷所は「同国同郡同町ノ内本町七拾貳番地 広運館活版所」

(2) 著者について

・国立国会図書館の著者情報では「有松樾」とあるが誤りでは?

→『香良志』序文に「我郷有松樾居士者、蓋亦慨世傷時之士也」とあることから、著者を「有松樾」としているが、これは「我が郷に『松樾居士(しょうえつこじ)』有り、蓋(けだ)し慨世傷時(がいせいしょうじ)の士なり」と読むべきであり、字(あざな)を示す部分は敬称居士の前の「松樾」である。

→また、同序文に「抑居士之於斯世也似閑而非閑試問其所職曰村長曰県会議長曰某曰某々其事之煩不俟言」
(そもそもこの世における居士は、暇のようで暇ではない。試しにその職務を尋ねてみれば、村長やら県会議

長やら某やら何某やらとその煩雑なことは言うを俟たない)とあり。

→『幸世村誌』(昭和 48) 180 頁に、「幸世村歴代三役」の記載あり。『香良志』序文は明治 26 年 10 月 10 日に生駒道親が記しているもの。この時までには、村長となった人物は、明治 22 年 5 月 10 日に当選した安田丞右衛門(賀茂、天保 6 年生)、明治 26 年 5 月 8 日に当選した飯田三郎(賀茂、安政元年生)の 2 名。

→松井拳堂『丹波人物志』(昭和 35) 280 頁の「飯田三郎」の項目に「諱は親民、字は生則、松樾と号し」とあったため、『香良志』の著者は、松樾居士(しょうえつこじ)つまり第 2 代幸世村長飯田三郎と判明した。



▲飯田三郎(『幸世村史』より)

・『丹波人物志』で紹介されている飯田三郎

柏原藩家老生駒三猿の二男。14 歳で福知山半家老飯田助之進の養子となる。ひととなりは剛毅で世におもねることもなく、好んで漢籍を読み、ドイツ学を究め、生理学を好み、法制経済に通じた。柏原叢志、柏原笑記の著書がある。明治 23 年兵庫県会議員に選ばれて議長となり、柏原中学校創立に尽力し、家に山西義塾を設けた。明治 28 年 11 月 30 日病死。年 42、南田井の墓地に葬られた。郷人が追慕して頌徳碑(衆議院議長楠本正隆選文)を円通寺に建てた。

→幸世村長就任や『香良志』についての記載なし。今回の調査で飯田三郎の事績について増えた



▲円通寺境内にある飯田三郎頌徳碑

(3) 印刷所「広運館活版所」について

→「広運館活版所」は、明治 16 年に柏原町で創業(廃業年は不明、現代表の曾祖父が創業)、日本で活版印刷が本格化するの明治 3 年以降。現在も柏原町にあり(柏原町柏原 2934-1「きくもとグラフィックス株式会社内「廣運館活版所」)。現在の会社の創業は昭和 8 年(菊本印刷所、現代表の祖父が創業)、設立は平成 13 年(代表は菊本裕三氏)。(同社 HP<URL: <https://kohunkankappan.jp/>>より)

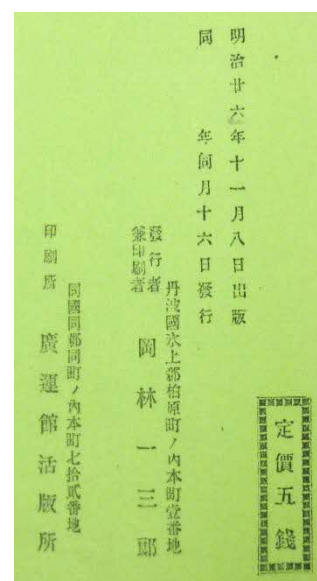
→現在、きくもとグラフィックス株式会社が運営する「廣運館活版所」は、柏原町柏原 3618(本町公民館横)にあり

2. 『香良志』にみえる香良地区の記述について

※『香良志』本文の記述を現代語訳し、適宜注釈をつけました(□で囲っている部分です)

※『香良志』本文の記述について、簡単な解説をつけました(矢印→の後が松下の見解です)

※本文をご覧になりたい方は、国立国会図書館デジタルコレクション HP で『香良志』を直接検索してください



▲『香良志』奥書

◎香良はどのような土地であるか

香良は丹波国氷上郡にあり油良庄(ゆらのしょう)に属している。和名抄(わみょうしょう)に掲載の十六庄の一つである。

→和名抄(平安時代の漢和辞書)に掲載されているのは16の郷(栗作・拳田・石生・船城・春部・美和・竹田・前山・佐治・伊中・賀茂・氷上・石前・葛野・沼貫・井原)で、庄ではない。由良庄は、現北油良・南油良あたりに所在した庄園。『丹波志』(寛政6年<1794>序のある地誌)では、伊中郷に位置付けられている。

元の名は「加和良」である。まさしく鎮守の神名によっている。天和年間(1681~84年)に村名を改めて「香良」とし「かうら村」(読むときは「こうら」村…松下注)と名付けた。

→産土神は加和良神社(近世は住吉大明神)。江戸時代は住吉大明神。『延喜式』神名帳の氷上郡17座のうち同名社(小社)に比定される。

→天和年間の史料が何を指すのか不明。ただし、『幸世村誌』449頁にある式内社加和良神社の「取調書」内に「古の社号を以て村名を加和良村と謂い用い候処、天和年中村名を加和良村と変更す、只往古よりの謂い慣わしのみ、不詳」とあり。

村の領主は初め別所豊後守で、後に三田藩九鬼氏となり、その後、豊岡県の管轄下に属し、最終的には兵庫県の管轄下に入った。明治22年「自治制」(市制・町村制…松下注)が施行され、ここに油良村(のちに改めて幸世村になる)の一つの「まがき」(集落のたとえか…松下注)になった。

→慶長6年(1601)旗本別所領、寛永5年(1628)幕府領、寛永10年三田藩領となり幕末に至る。明治4年1月に多紀・氷上郡の2郡は豊岡県に属し、明治9年8月に兵庫県に編入。明治22年の町村制施行に伴い油良村が成立。同24年に油良村が幸世村と改称(『兵庫県の地名』I)

→幸世村は、絹山・香良・伊佐口・日比字・鴨内・小谷・沼・北御油・南御油・井中・北田井・南田井・西田井・田中・氷上・多田野・南油良・北油良・棧敷の地区で構成。(『幸世村誌』)

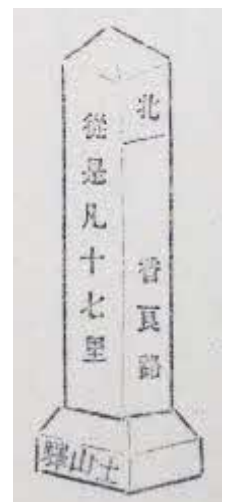
道標の設置案

戸数は約110軒、人口は約510人で、

→『幸世村誌』178頁の表によると、幸世村成立当時(明治21年)の規模として、香良の本籍(戸数211,人口502)、現住(戸数110,人口481)とあり。

神戸から離れることおよそ21里(1里は約3.9キロメートル…松下注)、その西南1里あまりを隔てて成松の町があり、北西1里あまりに佐治の町があり、ちょうど南に3里に柏原の町がある。村の西端に南北を貫く一線の道路は神戸から豊岡に向かうもので(東県道というべきもの)そのまっすぐなことは矢のようでもあり、その平らなことは砥石のようでもある。車を速く走らせてもよいし、馬を走らせてもよい。往来はとても都合がよい。しかしながら、神戸と三田との間に多くの山々が幾重にも重なり、道路は凸凹、道が非常に険しく通過するのに困難なところがないわけではないので、最近、神戸からこの地に行く者の多くは、道を播州経由に取るという。

→「神戸から豊岡に向かうもの」とは、県道「神戸豊岡線(柏原町上小倉、多紀郡界より生郷、幸世、芦田、佐治を経て遠阪、朝来郡界に至る、延長8里7町7間5分、橋梁28)」(『丹波氷上郡志下巻』1201頁)のことか。



土山停車場の門前にあるのがよいだろう

いわゆる播州道というものは高砂から福知山に通じるもので(西県道というべきもの)、山陽鉄道土山(または加古川)駅より小野、社、成松を経て村の西方十数町(1町は約109メートル…松下注)のところに居る。しかしながら、このように道によるが、あるいは成松を経ることなく朝坂から東に移動することもできる。一方、社より直接柏原に出ても損ではない。もし神戸の一番汽車で出発したときは、冬季であっても、日を経ずして達することができる。その車賃は土山より社まで約30銭、社より香良まで77、8銭である。

→播州道が『丹波氷上郡志下巻』1201頁掲載のどの県道にあたるか不明。加古川沿いの道か。「社より直接柏原に出ても」とあるのは「柏原社線(柏原町見長、県道1号分岐点より久下村谷川、多可郡界迄、延長2里14町49間5分、橋梁9)」のことか。

→山陽鉄道会社が明治22年9月に姫路～神戸まで開通し官設鉄道と連絡した。「神戸の一番汽車」とは、神戸から土山や加古川駅に向かう汽車のことか。ちなみに、阪鶴鉄道(現・JR 福知山線)は、明治32年5月に柏原まで、7月に福知山まで開通。播州鉄道(のち播丹鉄道株式会社)(現・JR 加古川線)が谷川まで乗り入れるのは大正13年。

→この「車賃」は人力車などのことか。氷上郡では、人力車は明治7年頃より、荷車は9年頃より初めて使用。一時は数百両あった人力車も30年頃より自転車が流行し、42年頃より乗合馬車、大正2年頃より乗合自動車が出てきたため、14年には激減して128両に激減(『丹波氷上郡志下巻』1214頁)

◎香良にどのような景色があるか

香良は以前から景色がすぐれていることで周囲の国々に知られている。その山は秀で、その石は高くそびえたち、その松は誇らしく、水もまた甚だ清浄で、風も甚だ気持ちがいい。

山には寺があり、寺には庭があり、庭には滝や枝垂桜がある。岩瀧寺という。春は花を観るのがよく、夏は暑さを消してくれ、秋の月、冬の雪も優れた景色でないものは一つもない。この山に登る者なら、ふたたび遊び楽しむことを願わない者はいるだろうか、誰もいない。この他にもこの山で見るべきところはもっと多い。後文に詳しく記している。そしてその中でもとりわけ、瀑布が最も壮観きわまるものである。

◎岩瀧寺 真言宗 東方の山腹にあり 高野大師(弘法大師…松下注)開基 観音堂 庚申堂 大師堂 稻荷社

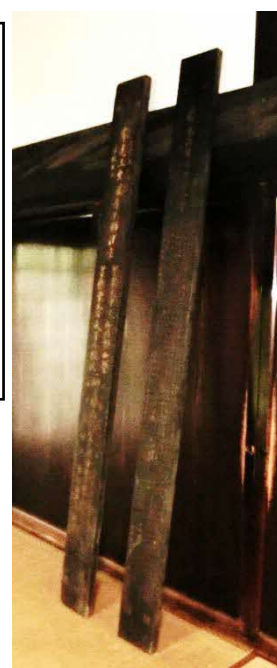
昔、別所氏の寄進による仏供田(65石)・修復田(5石)・灯明田(1石2斗)、また頼朝公が下付した禁札(禁制の条項を書いた立て札・制札…松下注)などがあつた。

今はただ別所氏の棟札を残すのみである。

ある説では、稻荷社こそが加和良神社であると。おおよそ従来本郡にあつて社殿が古色を帯びている屈指のものであつたが、惜しむべきは先年にこれを改造し元の体裁は全く変わってしまった。

→この記載と同内容のものが、『幸世村誌』447頁の「取調書」(明治29年に県知事宛の報告書)にあり

→慶長17年5月吉祥日、願主播州別所豊後守重治息女刀歳銘のある岩瀧寺不動礼堂棟札を実見(2012年5月調査)、棟札の内容については、『幸世村誌』453、454頁にあり。





▲観音堂（本堂）、庚申堂、大師堂、稲荷社（稲荷社の写真は同寺 HP より）

この寺は庭池が有名である。春夏の間、遊びに来る者が最も多い。（但馬の名望のある儒者「池田翁」（池田草庵…松下注）のような方は毎年必ずやってくる）。庭池以外にも庭池あり。いわゆる、その松、その石、その水、その雪、その月など、おおよそ眼に映し出されるものは全て、その庭池でないものはない。どうしてまたわずかな一つの小さな庭池だけを賞すべきだろうか。この景色を見て幻滅せず、またこの景色を眺め鑑賞して損をすることはない。千年取りついても尽きる時はない。寺の景観的な価値もまた大なるというべきであろう。（池田翁もその価値を羨んでいたか）

●垂桜…寺の北畔にあり。周囲おおよそ6尺5寸、掩蓋（えんがい、物の上にかぶさる覆いのこと。ここでは桜が覆いかぶさっている広さのことをいうか…松下）おおよそ33坪、花の満開時おおよそ五月十日。

●飛泉…寺の庭前、岩壁の間から直下している（小瀑布ということもできる）下に池があり。池には魚がいる。しばしば黒と白のまだら模様の「老鯉」がいてまさに「龍」に化けんとするようなものも見える。

→池田草庵（いけだそうあん、1813－1878、江戸後期-明治時代の儒者。弘化 4 年（1847）郷里の但馬に青谿（せいけい）書院をおこし、おおくの子弟をあつめる。但馬聖人といわれた。名は緝。字は子敬。通称は禎蔵）の漢詩が、『香良志』の最初の頁にあり。



踪跡世（卅）年淹俗寰
今朝始是入名山
雲巖絶壑蒼松老
一道飛泉乱石間
弘化甲辰九月 草庵池田緝作

- ・一句目の「世」は「卅」の誤りと巻末正誤表にあり
- ・一句に7字、全部で4句28字の七言絶句
- ・第1・第2・第4句がそれぞれ「寰（カン）」「山（サン）」「間（カン）」と韻を踏んでいる（押韻）
- ・「弘化甲辰」は弘化元年（1844）のこと

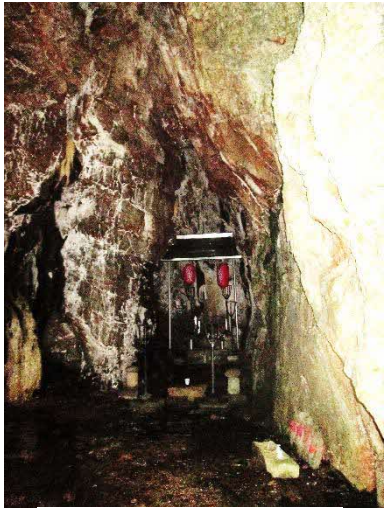
→『氷上郡志』によると、「但馬の儒者池田草庵、小島省齊と共に来り遊び詩あり、寺に蔵す」とあり

（大意）

踪跡（そうせき、事跡、あとを追うこと）三十年、俗寰（ぞっかん、俗世間）に留まる（但馬国広谷村満福寺に入るも後に儒学に転じ相馬九方に師事して還俗したことをいうか）。今朝はじめて名高い山（岩瀧寺のある香良谷峰のことか）に足を踏み入れた。雲は巖めしく絶壑（ぜつがく、切り立った険しい谷）に老いた青々と茂った松が立ち並び一道（いちどう、水などの細く長い一筋）の飛泉（ひせん、滝・瀑布）は乱れた石間（いしま、谷川などの石や岩の間）に流れる（独鈷の滝を表現したものか）。



独鈷の滝（雄瀧、おんだき）



洞窟内部の不動尊



不動尊拝殿

◎不動尊 独鈷の瀧の上にあつて、洞窟中に安置している。石像の高さは4尺6寸、高野大師(弘法大師)の作、洞窟の縦は6間、横は6間で、すべて奇岩でないものはない。このようなわけで、あるものは上に向いて重なり、あるものは下に向いて重なっている。その形はあたかも大小長短、幾多の龍や蛇が互いに昇り降りしているようである。だから、「上り岩」「下り岩」の名称がある。

しかしながら、ひとりこの洞窟のみがそのようではなく(岩が重なっているようではなく…松下注)、独鈷の瀧の辺りまでに岩は伸びており、おおむねそのようでないところはない(岩が重なっていないようなところはない…松下注)。

籠堂

本尊はこれまで「浅山不動」と称していた。以前、某剣客がここにいて研精(細かく調べること…松下注)すること十七日、たちまち一人の老翁がいた。白髪・黄顔で飄然(ふらりとやって来たり去ったりするさま…松下注)と夜に乗じてやって来て、この剣客に妙義(妙技のことか…松下注)を授けた。そのさまは、あたかも張良・黄石公の故事(黄石公は中国、秦末の隠士。張良に兵書を授けたという老人。張良はこの書により兵法を会得し、漢の高祖の天下平定を助けた)のようである。豁然(かつぜん。悟ること…松下注)と得るところがあった。

後に、大いに進み、「浅山一伝流」なるものを創始した。某は、久留米藩士であるという。また明治の初めまでは、郡山や福知山などの諸藩士も毎月不動尊に登り、「賽」(お礼のお祭りか…松下注)を怠らないことを例とした。

→浅山一伝流…天正(1573~1591)のころ浅山一伝によって開かれた武術の流儀。初めは剣術、居合、柔術、捕手、鎌、棒などを含む総合的な武術であったが、近世に入って各地に多くの分派を生じた。流祖一伝についても、分派によって伝承を異にし、その出身地、年暦とも明らかではない。(『日本大百科全書ニッポニカ』)。

→『幸世村誌』441~444頁に一伝流不動剣についての記載あり



護摩堂



▲岩瀧寺駐車場内にある石碑。岩瀧寺十世代浅山英雅の文字



▲県道交差点にある石柱。浅山不動尊の文字(岩瀧寺 HP より)

この地は奥深く遠いため精神病を治療するのに適当である。近村(田中村…松下注)の名医安田半畔は大いにこの地に見るべき価値を見出した。以前、書類を豊岡県に提出し公立癲狂院(てんきょういん、古くは精神病院のこと…松下注)を設置するよう要望した。県もまたこれを可としたがついに果たされることはなかった。今において摂津・播磨・但馬の諸国の人々が多く、籠堂に留まりいることが日常となっている。それからおおむね治らない者はいない。ああ、その土地の気候風土が物を移し固め覆うことができないということがあろうか、いやない。

→安田半畔は来吉と称し、鴨波(幕末・明治の南画家。文久3年(1863)丹波生。名は寿吉。画を田能村直入の門に学ぶ)の弟。安田の大本家半畔を継ぎ襲名。養父半畔は蘭医シーボルトに学び三丹の名医(『丹波人物志』373頁)『香良志』に出てくる安田半畔は、後者の半畔のほうか。

→香良病院のルーツ(同院 HP より)…「当院は、山懐に包まれた、緑豊かな山紫水明の地で香良脳病院として、昭和12年6月(64床)産声をあげた。地元古老の語りによると、大正の頃より当地の名刹 岩瀧寺の管理の下、各地から精神障害者が治療のため訪れ、近くの独鈷の滝(通称香良の滝)の水で療養する、いわゆる水治療が行われていた。時代の変遷とともに、医学も進み、科学的な治療法が行われるようになり、初代開設者 石井鹿蔵(第13・14代幸世村長…松下注)は病院開設を決意し、翌昭和13年より運営した。」



水治療跡(同院 HP より)

◎円悟寺 臨済宗 北方の山腹にあり。聖徳太子が翺造(創造、はじめてつくること…松下注)する。

→『氷上郡志』では「臨済山円悟寺(延命地蔵)臨済宗、妙心寺末。開基聖徳太子と伝ふ。開山仏徳大通禪師(応永十六年)、松隠和尚再興す」とあり。『兵庫県の地名 I』では、「臨済宗妙心寺派円悟寺は推古天皇八年聖徳太子の開基と伝える。以前は天台宗であったが応永一五年(一四〇八)愚中の再興で改宗したという。境内の樹齢千数百年と伝える榎(カヤ)の古木には風蘭が多生する」とあり。



円悟寺本堂



薬師堂

→不明

◎三如来庵 曹洞宗 北方の山麓にあり。僧大令が開基。

→『氷上郡志』では「三如来寺(阿弥陀、釈迦、薬師)曹洞宗、圓通寺末。往古は林光山延命寺と称す、延宝四年(1676)六月焼失し、正徳年中(1711~16)、円通寺二十六世大令和尚中興して三如来寺と改む、榎(かや…松下注)の大樹あり」とあり。

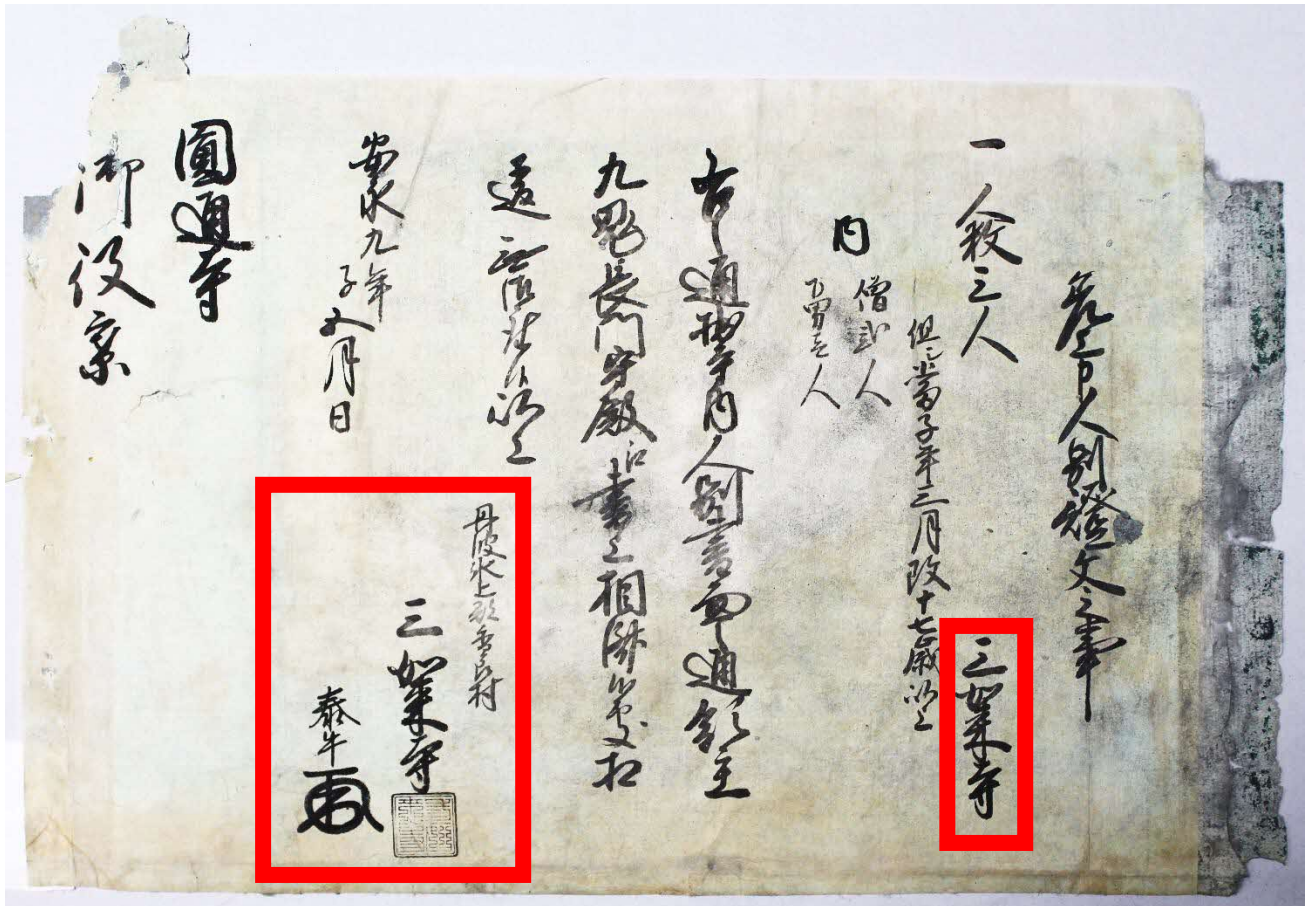
→円通寺 HP に「旧来は大師堂として、弘法大師像と24世道明和尚の像などが祀られていました。その後、香良の三如来寺が廃寺になった時、円通寺がお預かりした三如来像が祀られています。左から釈迦如来、阿弥陀如来、薬師如来の像です」とあり。



三如来堂(円通寺 HP より)



→(参考)氷上郷土史研究会で行っている円通寺襖下張りはがして出てきた、三如来寺が安永9年(1780)に本寺である円通寺に提出した人別改め(人口調査)。三如来寺内に十七歳以上の者として僧2人、下男1人の合計3人がいることを、三田藩の役所(この時の九鬼長門守は三田藩第8代藩主九鬼隆邑のこと)に報告済みである旨を、同寺住職の泰牛が円通寺御役寮に報告した文書。この文書が不要になったため円通寺の襖の下張りに再利用された。



【解読筆写】

差上申人別証文之事

一 人数三人 三如来寺

但シ当子年三月改十七歳以上

内 僧貳人 下男壹人

右之通、拙寺内人別書面之通、領主

九鬼長門守殿江書上相済候処、相

違無御座候、以上、

丹州氷上郡香良村

安永九年

三如来寺印

子五月日

泰牛(花押)

円通寺

御役寮

【書き下し】

差し上げ申す人別証文の事

一 人数三人 三如来寺

但し当子年三月改め十七歳以上

内 僧貳人 下男壹人

右の通り、拙寺内人別書面の通り、領主九鬼

長門守殿へ書き上げ相済み候 処、相違

御座無く候、以上、

丹州氷上郡香良村

安永九年(1780)

三如来寺印

子五月日

泰牛(花押)

円通寺

御役寮

天神社

→不明

◎加和良社 上筒穂命(表筒男命、うわつつのおのみこと、記・紀にみえる神。黄泉(よみ)の国の汚れをあらいな
がそうと、伊弉諾尊(いざなぎのみこと)が筑紫の日向で禊(みそぎ)をしたとき、海から生まれた筒男の三神の一神
で、海上に出現。この三神は住吉神社にまつられ、航海の守護神として信仰されている。「古事記」では上筒之男
命。…松下注) 村の西部にあり。延喜式本郡十七座の一つである。元は住吉社と称した。あるいは住吉社は加和
良社と別神かもしれない。



▲加和良神社拝殿、本殿、拝殿扁額(住吉大明神)、式内社加和良神社の標柱、鳥居扁額(加和良神社)

→『氷上郡志』では「産土神、村社加和良神社(上筒穂命)例祭十月十七日 嵯峨帝の御宇に創立せりといふ、
式内神社たり、元は岩瀧寺の鎮守なりしとの説あれども信じ難し、旧村岩瀧寺との関係ありしは疑ふべくもあ
らず、鳥居の額は空海の筆なりと伝ふ、境内老樹多く殊に巨櫟の如きは周囲二丈八尺六寸にして、大名草の大
銀杏に亞(つ…松下注)く郡内巨樹の一なり」とあり。

→『兵庫県神社誌 上巻』の「村社 加和良神社」の項(991頁)では、

鎮座地 幸代村香良字陳道ヶ原 [丹波志]香良村 [特選神名牒]香良村字清水(氷上郡幸世村大字香良)
[神祇志料]今香良村にあり

祭神 上筒穂命 ○調書松尾大明神、梅宮大神をも記す

由緒 創立年月不詳なれども、嵯峨天皇の御代創立すと伝え一の鳥居に伝空海筆の額面有り、天正年中兵火に
罹り、拝殿一二の鳥居共に灰燼に帰す、又云う元亀寛永の頃浅山一伝流の開祖浅山吉光なるもの諸国遍歴に
際し当社に祈願すという

[丹波志]加和良神社 式内神名今住吉大明神と奉唱、住吉の夢想に依て香良え弘法大師来玉う、岩龍寺開基

[延喜式 卷十 神名式下]丹波国七十一座<大五座 小六十六座> 氷上郡十七座<並小> 加和良神社

[特選神名牒]加和良神社 祭神 武内宿祢命

[神祇志料]加和良神社 河原明神と云う 丹波志、神社明細帳○按村中に香良谷あり加和良並に音相近し

[本殿再建棟札○享保十一年]奉再建住吉大明神靈廟堂宇社頭安穩邑内氏子繁盛息延命五穀成熟如意祈所
于時享保十一丙午歳南呂(8月のこと)吉祥日 神主足立務右衛門○外略

境内 二百十九坪 民有地

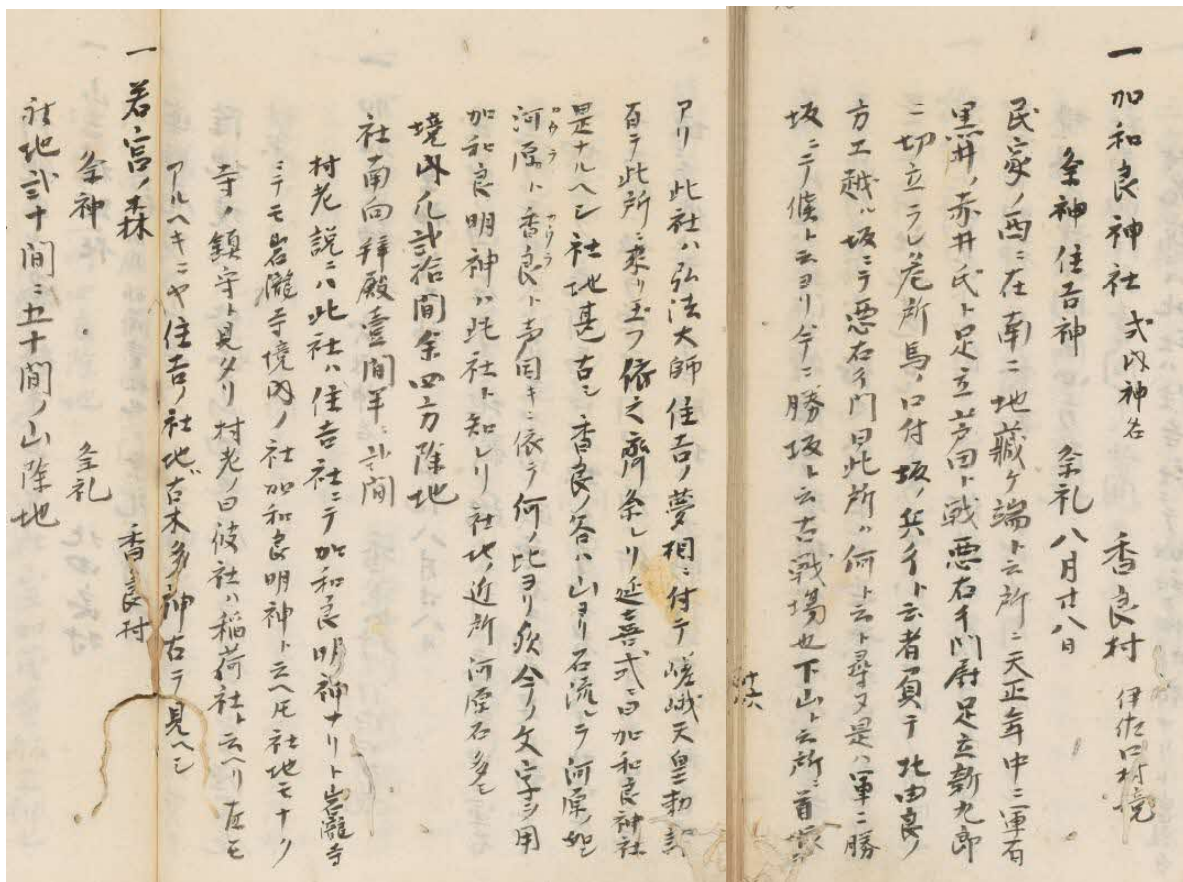
営造物 本殿 檜皮葺流造 二坪八合八勺 拝殿 瓦葺流造 十六坪

境内神社 若宮神社(応神天皇)

祭日 夏祭 八月二十八日○太陰暦 例祭 十月十七日 [神社調書]神幸式あり

宝物及貴重品 一 本殿再建棟札 享保十一年(1726)

氏子 百十五戸



(大意)

一、加和良神社 式内社(平安時代編纂の『延喜式』神名帳に掲載の神社)の神社名 香良村(伊佐口村境)

祭神 住吉神 祭礼 八月二十八日

民家の西にあり。南に地蔵ヶ端というところに、天正年中(1573~92)に軍(いくさ)あり。黒井(城主の)赤井氏と足立・芦田と戦い、悪右衛門は足立新九郎に切り立てられ危ういところ、馬の口付(馬の口を取って引く人)の坂ノ兵衛という者が背負って北由良の方へ越える坂で、悪右衛門が言うに「ここは何という(ところ)か」と尋ねた。「是は軍に勝坂でございます」と答えた、ということで、今は勝坂という。古戦場となっている。下山というところに首塚あり。この社は弘法大師が住吉の夢想(夢の中に神仏の示現があること)し、嵯峨天皇の勅許があつて此処に来られた。これによって、いつき祀つた。延喜式にいう「加和良神社」はこれである。社地は甚だ古い。「香良ノ谷」は、山から石が流れる河原のようである。河原(かわら)と香良(こうら)と音が同じなのでいつの頃からか今の文字を用いた。「加和良明神」はこの社であるとわかる。社地の近所は河原石が多い。境内はおおよそ二十間余り四方が除地(年貢免除地)である。社は南向き、拝殿は一間半に二間(の大きさ)。村の古老の説では、この社は「住吉社」であつて、「加和良明神」であると。岩瀧寺のほうでも、寺の境内の社は「加和良明神」というのだけれども、社地もなく、寺の鎮守とみている。村の古老曰く、その社は稻荷社という。左にもある(後に絹山村の稻荷社という項目があり)社を考え合わせるべきところである。住吉の社地は古木が多く神の古さが見える。

一、若宮の森 香良村(祭神・祭礼の記載はなし)

社地二十間に五十間の山は除地である。

若宮

古は高野大師(弘法大師…松下注)が書いた扁額があり、華表(かひょう、神社の鳥居…松下注)に掲げていた。天正の役で兵火に遭い鳥有(うゆう、何も存在しないこと)となった。

→『兵庫県神社誌』所収「由緒」には「天正年中兵火」とあるが、他には見えず。

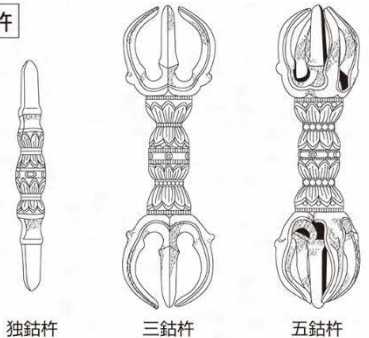
◎独鈷瀧 東方の谷間に在り。高野大師(弘法大師…松下注)独鈷を投げたことにちなんで名づけられた。長さ5丈3尺くらいである。丹後の碩儒(せきじゆ、ひろく深い学問を身につけた学者)野田笛浦が以前に改めて「玉龍」とした。それから今は独鈷と称している。この瀑(ばく、滝のこと…松下注)は大きくはないものの、両方の崖は絶険(ぜっけん、非常に険しいこと…松下注)で石は巖々(がんがん、山や岩などが高くけわしくそばだつま)である。それに加え、往時は一大老桜がそのそばに横たわり、清明(せいめい、二十四節気の一。4月5日ごろ…松下注)花開く頃、見ごたえがあるが、近年に至りついに完全に枯槁(ここう、草木が枯れること…松下注)してしまった。

→『氷上郡志』(上巻、211頁)では、不動山岩瀧寺の項に「奇岩絶壁の間に有名なる独鈷の瀧あり、丹後の儒者野田笛浦の来り遊び玉龍と名づく、俗に香良瀧と称す、本郡第一の名勝なり」とあり。

→独鈷とは、真言密教の修法に用いる、両端が分かれなくてとがっている金剛杵(こんごうしよ)。鉄または銅で作られている。唯一の真如法界を表わし、また勇猛・摧破などを意味するとされる。とこ。独鈷杵(とっこしよ)。とっこう。(『日本国語大辞典』)

→野田笛浦…のだてきは、1799~1859、江戸時代後期の儒者。寛政11年6月21日生まれ。丹後田辺藩士。江戸で古賀精里(せいり)、古賀侗庵(どうあん)にまなぶ。文政9年漂着した清国船の清人と筆談し、「得泰船筆語」をあらわし有名になる。安政4年家老となり、藩政改革に尽力した。安政6年7月21日死去。61歳。名は逸。字は子明。通称は希一。別号に海紅園。著作に「海紅園小稿」など。(『日本人名大辞典』)

金剛杵



独鈷杵

三鈷杵

五鈷杵

▲デジタル大辞泉「独鈷」図版より

◎雌瀧 独鈷の上にある。

→めんだき。不二の瀧のこと。



▲独鈷の滝

▲登山道から見た不二の滝、雌瀧(めんだき)とも(岩瀧寺 HP より)

◎無名洞 独鈷の西にある山腹にあり。

→不明

◎岩瀧橋 木杠(杠こう、とは丸木橋のこと…松下注)である。岩瀧寺へ至るので名付けた。



▲2016年1月香良自治会建造「岩瀧寺橋」

◎発句之碑 橋の左のほとりにあり。某女王の御筆、田辺某が作ったもので、その句には、「なんとふ、こころも涼し 瀑の音」(なんとこのころもすずし たきのおと)とある。田辺は絹山村の雅人(がじん、風流なひと…松下注)である。今はもういない。

→岩瀧寺のウェブサイトでは「伏見宮文秀女王」が書いたとあり。文秀女王(1844~1926)とは、明治-大正時代の皇族。天保15年1月29日生まれ。邦家(くにいえ)親王の第7王女。嘉永4年(1851)大和円照寺門跡をつぐ。維新後は伏見宮家に復籍となったが仏門にとどまり、皇族最後の尼門跡となる。書、和歌にすぐれた。大正15年2月15日死去。83歳。幼称は福喜宮。法号は大和。(『日本人名大辞典』)

→「田辺某」は不明。『幸世村誌』絹山の項目のところ(435頁)で「(郷倉には)明治になってからは米は入れないで、剣術の道場に使っていた。田辺某という免許の剣術使がいて教えたという。又、田辺氏に秋月という俳諧をよくする人があって、香良の円悟寺や岩瀧寺の門前に発句の碑を建てている」

◎石灯籠 道の左側にあつて橋に近い。郡の素封家(そほうか、大金持ちの人…松下注)で稻上という人がかつてこれを建造したという。

→不明

◎道分の碑 県道の東のほとりにあり。建造者は右に同じ。

→不明

◎牛の首 不動窟の上方にある一つの小さな樵路(しょうろ、きこりなどの通る山中の小路…松下注)で、下のほうからこれを望むと牛の首のようである。だから名付けた。

この路は石磴(せきとう、石のある坂道…松下注)で、とても急峻で、四蹄(してい、馬一頭のこと…松下注)鞭打ち進めども、ついに王の御車の回らないことを心配して、六手(むつて、駕籠を三人で担ぐことか…松下注)で登り来ようとするもなお、陶輿(とうい)が落ちるのを恐れた。いわゆる「左担道」(『五雑組』巻四地部二(『東洋文庫』610、五雑組2、75頁)に「蜀(四川省)の江油県(今の江油市)に左担道がある。その道たるや極めて危険で、左肩に荷を担いでいるものが、右肩に易えることができない」とあり。つまり危険な道のたとえ…松下注)のようなもので、このような類の場所でも、しかしながら山のきこりは昇り降りしてもめったに踏み外すことはない。まさしく、その習慣がそうさせるのである。

近村に一人の雅客(がかく、風流な人…松下注)がいる。近頃、その名が俗なことを嫌い、牛首を改めて某々としようとした。そして私に問うた。私が答えるには、中国に牛首山という名勝があつて妙趣(みょうしゅ、すぐれたおもむき…松下注)、清賞(せいしょう、風雅な遊び…松下注)とし、由緒も古く、人は俗であるとは思っていない、よって改めなくても結構である、と。ついにやめた。

→不明

◎住吉森 今、加和良の社のあるところである。縦28間、横24間。喬木(きょうぼく、丈の高い木。榿、松、杉など…松下注)が多い。一番大きなものは周囲2丈5尺に至る。



◎鴨池 独鈷の上にあつて雌瀧に近い。冬の中には群れ遊ぶ鴨がやってきて水を浴びている。だからこの名がある。

→不明

◎蛇池 岩瀧寺の下にあり。大きい旱の時にも水が絶えることがない。伝えていうには、昔、蛇の頭を投げたことがあつて有名になったといういわれがある。



▲白玉大明神。鳥居の横に、蛇池という小さな池があり(岩滝寺 HP より)

◎勝坂 村の西部にあり。天正年間(1573~92)に黒井城主赤井氏の土豪足立、芦田などと戦つたところ。

→『丹波志』加和良神社の項目にみえる伝承を参照

◎門蹟 岩瀧寺の下にあり。昔の二王門(におうもん、中門。寺の正面の、外側の南大門に続く、その奥の門。二王の像を置くので二王門という…松下注)の遺跡である。

→不明

◎坊跡 ところどころにこれがある。伝えていうには、昔は寺坊が千宇あつたと。香良千軒の呼び名がいまなお残っている。

→不明

◎邸墟 村の中部にあり。そのところを垣内と名付けた。いまはただ断絶を認めるのみである。その人は足立権頭、思うに昔の土豪であろう。

→不明

◎城墟 東方の山上にあり。山を城山という。あるいは本当の名は岩山であると。今、一の丸ないし三の丸の故地がある。城主、氏名、時代はともに不詳である。

→『丹波志』(名著出版本、453頁)に「古城 香良村ノ奥」として、「不動の奥、岩山の上に在り、城山と云う、一ノ丸、二ノ丸、三ノ丸と云う所有り、少し北へ下る所に泉有り、南の麓の字城カ腰と云う。上を五町斗り。古城主姓名知らず。古某籠城の時、西の山より大筒にて打ちしと云い伝う。其所は尾続きなり。陳小屋跡と云う跡あり。小屋尾と云う。北に四方見えず。少しの谷有り。隠し谷と云う。委しきこと知らず」(適宜送り仮名を振って原文を書き下した…松下注)

おわりに

・皆さんへのお願い 香良地区の歴史書・地誌としての“新・香良志”を一緒に編みませんか？

『香良志』残りの部分を一緒に解説する会…不明の箇所探索、香良を訪れた有名人(池田草庵)地区内の古文書・石造物・自治会文書などの歴史資料調査の再開、成果公開

・連絡先

神戸大学地域連携推進本部 松下正和

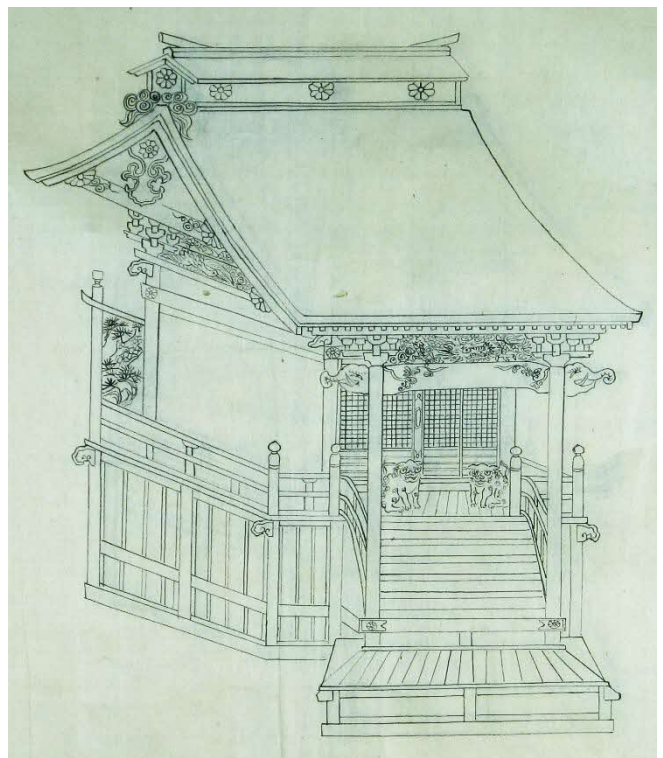
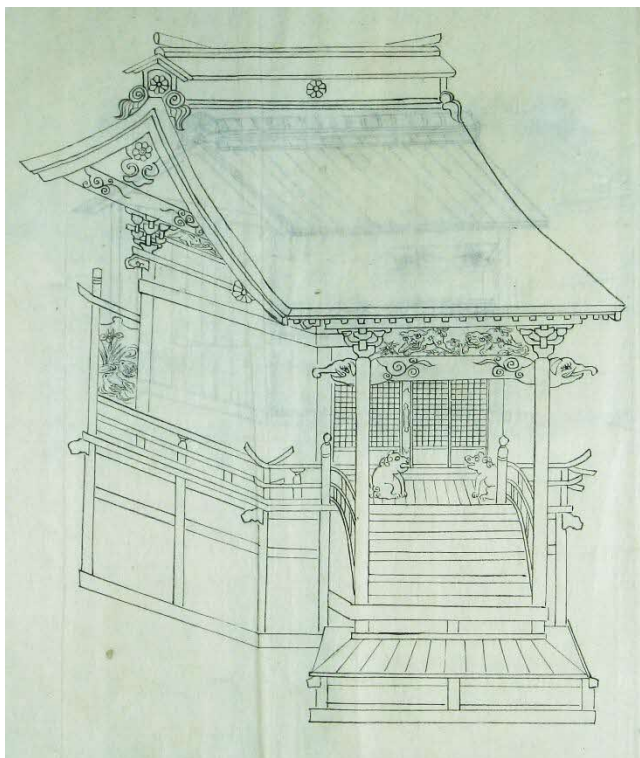
電話 078-803-6504(執務室)、5575(修復室) メール m_matsushita@port.kobe-u.ac.jp

【参考文献】

- ・木戸貞著・古川茂正編『丹波志』(名著出版、昭和49年復刻)
- ・『丹波氷上郡志』(名著出版、昭和50年復刻、昭和2年丹波史談会編)
- ・『兵庫県神社誌』(財団法人兵庫県神職会、昭和12年)
- ・松井拳堂『丹波人物志』(昭和35年)
- ・幸世村誌編集委員会編『幸世村誌』(同、昭和48年)

【謝辞】

報告レジメを作るにあたり、香良自治会長をはじめ香良地区の皆様には地区の案内や貴重な資料情報をご提供いただくなど、大変お世話になりました。また氷上郷土史研究会山内順子様(円通寺襖下張り)、足立義昭様(円通寺飯田三郎碑・三如来堂)からご教示や写真などの資料提供をいただきました。ここに記してお礼申し上げます。



加和良神社取調書
(個人蔵)